なぜ「親知らず」を抜歯するのでしょうか？

「親知らず」がきちんと生えない人が増えています

永久歯の奥歯のうち、歯並びの一番奥にある第三大臼歯（智歯）は、20 歳前後に生える歯で、俗に「親知らず」といわれています。この「親知らず」は生えない場合もかなり多く、生まれつき歯の芽が欠けている場合や、あごの中にとどまっているもの（埋伏歯）が全体の３割くらいあります。

時代別にみた	縄文	古墳	鎌倉	現代
全部の「親知らず」の萌出率（%）	８１．０	６２．７	４２．９	３６．０

このように、現代人では「親知らず」が１～２本欠けていたり、全く生えないことも珍しくありません。

現代人は、歯の大きさに比べてあごの大きさが小さいために、「親知らず」の生えるスペースが不十分で、歯肉から半分くらい頭を出した状態（半埋伏歯）のままになることがよくあります。「親知らず」が生えてくることで咬み合わせが変わってしまい、顎の関節に障害（顎関節症）を起こすこともあります。

また、きちんと生えた場合でも、「親知らず」は退化傾向にあるため、歯の形は異常な形をしていることが多く、ブリッジや部分入れ歯の支えの歯にならないことがしばしばです。

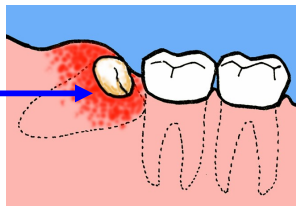

図1 智歯周囲炎

智歯周囲炎を起こすこともしばしば

「親知らず」のまわりが不潔になって、俗に「親知らずの痛み」（智歯周囲炎）（図１）という口が開かなくなるようなひどい炎症を起こすことがあります。あごのまわりの組織は炎症が広がりやすく、ひどくなると入院治療が必要になることもあります。半埋伏歯では、さらに隣の歯も虫歯や歯周病になりやすい（図２）という点でも注意が必要です。

埋伏歯は要注意

歯は、お口の中にきちんと生えて、隣の歯ときれいに並び、上の歯と下の歯がしっかり咬み合わさっているべきものです。それに対して、埋伏歯というのは異常な状態ですから、注意が必要です。「親知らず」に限らず、埋伏歯を長期間観察していると、嚢胞（のうほう）（図３）といって、顎の骨の中に病的な袋ができることがあります。こうしたことから、埋伏歯は定期的な観察が必要であり、抜歯の適応となることが多いのです。

「親知らず」を抜くなら若いうちに

「親知らず」を抜く際には、歯肉の炎症がないことが条件となります。腫れて痛い時に抜きますと、炎症がますます悪化してしまいますので、炎症がある場合には抗菌薬などで炎症を抑えてから抜くことになります。

抜いた後の骨の再生力は若い時の方が強いです。それに、「親知らず」があることによって隣の歯が虫歯や歯周病になってしまう前に抜く方が良いでしょう。「親知らずを抜くなら若いうちに」です。

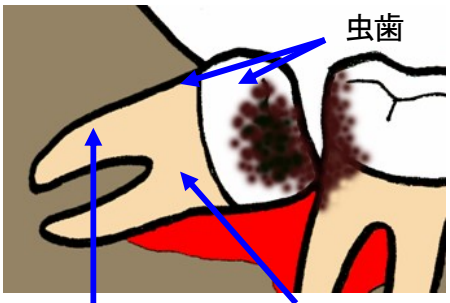

図２

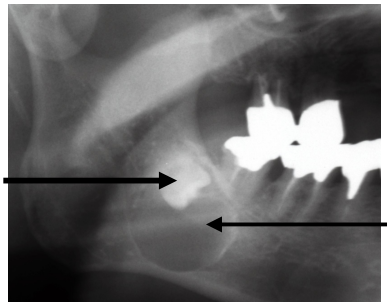

図３　埋伏智歯が原因の嚢胞